

銀河の彼方に思うこと

この夏、ジョージ・ルーカス監督制作の映画『スターウォーズ・エピソード3 シスの復讐』が公開され、二十八年目にしてついにシリーズが完結しました。私も学生の時に第一作を見て以来、新作を楽しみにしてきました。最初の第一作から第三作のシリーズは、世界中の神話や物語を参考にして制作されたといわれるように、主人公ルーク・スカイウォーカーが様々な困難に遭遇しながらも青年から大人へと成長していくという典型的なテーマで、しかも登場人物が単なる脇役でなくすべて魅力的で、観客がそれぞれの好みでロールプレイ（役柄を演じてみる）をしてみたくなるような冒険譚としてまさに王道を行く作品でした。第四作から第六作は、ルークの父親アナキン・スカイウォーカーが主人公ですが、単なる冒険譚で終わらないのは、その伏線として、やがてアナキンが、第一作から第三作の敵役・悪の権化ダース・ベダーに変身するという暗い未来が存在することを前提としているからです。

さて、この映画に思うことは、二十八年の歳月をかけて一つの物語を完結させることは、映画制作に携わる膨大な数のキャスト・スタッフの総力を結集するという大事業であり、変化の激しい現代にあつて、かつての幾世代にも渡った宗教建築にも匹敵する困難さをよく克服したということへの敬意の念です。このことに思いをめぐらしながら、ジョン・ウィリアムス作曲のテーマを聴くと、私たちもあらゆる難関に立ち向かう勇気をもらうことができるように思います。

また、映画の中に含まれる様々な要素の影響を批判的にとらえることの大切さを感じます。この世界は多様な考え方が対立しながら存在しています。『スターウォーズ』はアメリカ合衆国のような共和制が国家・社会の最良のものという価値観で作られています。映画は敵を倒すというテーマであれば、単純な勧善懲悪というわかりやすさが求められます。もちろん、ハリウッド映画なので当然なのですが、第一作から第三作には、第二次大戦の正義の味方連合軍対悪の帝国枢軸国のイメージが下

敷きにしてありました。現在、テロの関与を指摘されているイスラム過激派がめざす社会は、十四世紀型のイスラム共同体という社会です。観客が表層的にあるいは逆に無意識的に影響されると、アメリカ型社会から見て他者であるイスラムそのものを敵と見なす危険性が潜んでいます。今日、この地上に絵に描いたような単純な悪役は存在しません。映画の遙か昔の銀河系の彼方という設定のなかで、空想力を大きく広げて遊び、どんなに興奮しても、あくまで娯楽性が高くなるよう誇張された作り物だと、少しでも冷静で醒めた理性を働かせながら楽しむことが重要だと思います。

次に思うのは、アナキンが、悪の象徴ダース・ベダーに変身せざるをえなかったのはなぜか、ということです。ユダヤ教・キリスト教では、人間の原罪を説きます。罪を犯さずには生きられない存在としての人間なのだといえます。大乘仏教では、人間はみな凡夫（ぼんぷ）であるのとらえ、日々煩惱にとらわれ苦しむ存在だと考えます。宗祖法然上人は、御遺訓『一枚起請文』に「一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無知のともがらに同じうして」と凡夫の自覚を説かれています。ひととき優れた才能を持ったアナキンが、さらなる力を求めて暗黒の側に墜ちていくのは、フランスの思想家モンテーニュやパスカルのいう私たち人間そのものに共通の悲惨さなのです。しかしながら、私たちはアナキンではなく、第三作（エピソード6）で、「フォース」の力を借りて、ダース・ベダーを父親のアナキンに立ち戻らせた息子のルークをロールプレイする選択もできます。そこに私たちは人間という存在に希望を見いだせるわけです。

ルークを支える「フォース」（バラモン教の「梵・ブラフマン」、老荘思想の「道・タオ」、朱子学の「理」のようなもの）とは、単に映画の中だけの荒唐無稽なものではありません。私たちは、日々お念仏を唱えることで、阿弥陀仏の慈悲の光明という「フォース」を体感することができ、人生において、正しい選択をすることができるのだと思います。

